

大学院の少人数授業の展開（1）

特別支援教育講座・山下 光

（1）授業の概要

大学院特別支援教育専攻特別支援学校教育専修の専門科目は受講者が5人以下の少人数になることが多いが、年ごとの変動がある。受講生の受講の動機や基礎知識はさまざまであり、授業形態、内容、水準もその年の受講生の関心やニーズによって調整する必要がある。今年度は、受講生に内部進学言語聴覚士（ST）国家試験受験資格取得希望者、外部入学の特別支援学校教員免許状取得希望者がいたため、シラバスの授業計画にしたがって講義形式での授業を行った。

授業の目的は、発達障害（知的障害・LD等の軽度発達障害を含む）、言語・聴覚の障害、重複障害等を対象とし、それらの認知・行動上の問題点とその原因となる脳の障害について考えることであった。また、到達目標は、発達障害や言語聴覚障害の原因や症状について、脳神経系の機能と関連づけて説明できるようになることであった。

（2）実際の授業の展開

授業時間は火曜5時限、受講生は大学院1年生の3名であった。

実際に授業を初めてみると、予想された以上に受講生の基礎知識に差があった。この授業内容を理解するためには、特別支援教育の知識に加えて、脳・神経系の解剖・生理学と認知心理学に関する基礎知識が必要であるが、それらに関する学習の経験が少ない受講生もいたため、当初用意した教材の中に、特別支援教育教員養成課程（学部）の教材や、医学部や医学系専門学校での講義資料を適宜挿入し、基礎的な知識の習得と確認を図った。また、少人数であることを活かして理解が不十分な個所があれば、すぐに質問するように指示し、質問があった場合はその場で回答するように努めた。

さらに授業への積極的な参加の促進と、疲れや眠気への対処として、関連した原著論文の音読（輪読）や、内容に関するディスカッション、インターネットを利用したその場での調べ学習を

導入した。解剖・生理の事項については、看護師国家試験、作業療法士国家試験、言語聴覚士国家試験、心理学の事項に関しては、臨床心理士資格認定試験、国家公務員試験などの問題を例示し、理解度の自己チェックを行わせた。

（3）授業評価

最終回の授業で自由記述方式のアンケートを行った。①「内容に興味を持てたか」という質問には、3名全員が「興味を持てた」という趣旨の回答であった。②「理解しやすい授業であったか」という質問に対しては、「理解しやすかった」という趣旨の回答が1名、「難しく理解が不十分だった部分がある」という趣旨の回答が2名であった。③「資料や教材が適切だったか」という問いには、「適切であった」という趣旨の回答が2名、「量が多いのと、形や大きさが違うので整理しにくい」という趣旨の回答が1名あった。④「改善点、要望」については、「医学の内容や心理実験の説明では動画教材をもっと使ってほしい」という回答があった。

（4）反省点と総括

大学院での少人数での授業の実施に関しては、毎年頭を悩ませている。特に、既に学部で特別支援教育の基礎教育を受けている内部進学者と、初めて特別支援教育に触れる他大学、他学部出身者が同じ授業を履修する場合には内容や到達レベルの調整が難しい。今回の授業内容も各受講生のニーズに答えられたかという点には問題が残った。

要望のあった動画教材の使用については、将来の使用を視野に、英語圏のフリー教材の収集を行っているが、聴覚障害学生の受講の便も考え、字幕化を進める必要がある。

また、今回は自由記述式のアンケートを使用した。このような少人数の授業の場合にはどのような方法で授業評価を行うのが適切かという点も重要な課題である。

大学院の少人数授業の展開（2）

特別支援教育講座・山下 光

（1）授業の概要

大学院特別支援教育専攻特別支援学校教育専修の専門科目は受講者が5人以下の少人数になることが多いが、年ごとの変動がある。受講の動機や基礎知識はさまざまであり、授業形態、内容、水準もその年の受講生の関心やニーズによって調整する必要がある。この授業は演習形式の授業であり、言語コミュニケーション障害の心理的な側面に関する最新の文献を読み、知識のアップデートを図ることと、この領域で研究論文の作成を行うための基礎を学ぶことを目的としている。また、到達目標として、①聴覚言語障害に関する学術雑誌を読んで内容を理解できるようになる、②文献を読み、まとめることを通して実践研究の基礎となるスキルを身につける、③専門的な内容に関するプレゼンテーションとディスカッションができるようになる、の3つを設定している。

（2）実際の授業の展開

今年度の受講生は3名であった。授業時間は火曜2時限であり、授業のスケジュールは以下の15回であった。当初の予定では最初の6回については以下のようにテーマを設定して研究手法に関する解説の講義を行い、後半は学生が各自興味ある論文を紹介する形式を予定していた。

1. 文献の探し方、読み方
2. プレゼンテーションの方法
3. レポートのまとめ方
4. 実験法の基礎
5. 調査法の基礎
6. 質的な研究法

しかし、今回は受講生が3名と少なく、またその中の2名は他大学、他学部からの進学者で聴覚言語障害の研究に関する予備知識が不十分であった。そのため、受講生からも聴覚言語障害の研究の方法についての基礎的な知識についての講義を増やして欲しいという要望もあり、発表に関しては各受講生1回として、講義形式の授業部分を増やすことにした。また、教材についても当初

は各研究法を用いた原著論文（和文）をもとに解説を行ったが、研究手法や統計に関する基礎知識が不十分でわかりにくいという意見がでたため、研究計画と統計に関する内容を、看護学領域の研究入門書、心理学科の学生向けの統計入門書を用いた講義を4回にわたって行った。また、大学図書館のホームページを利用した Pub Med などのデータベースの使用法、web ベースで提供されているフリーの統計処理ソフトについても、実際に操作を体験させた。

（3）授業評価

14 回目の授業で自由記述方式のアンケートを行った。①「内容に興味を持てたか」という質問には、3名全員が「興味を持てた」という趣旨の回答であった。②「理解しやすい授業であったか」という質問に対しては、全員が「難しく理解が不十分だった部分がある」という趣旨の回答であった。最終回に口頭で確認したところ、「論文の統計の部分を読むことに関しては前よりわかるようになった気がするが、実際に使うのは難しい」、「web データベースの使い方は何となくわかるが、英語のキーワードがわからないので検索しにくい。また、英文要旨を読んでも、内容がわからない」という回答があった。

③「資料や教材が適切だったか」という問いには、「論文は難しかったが、後から使った看護師用のテキストはわかりやすかった」という回答があった。

（4）反省点と総括

今回は受講生が3名と少なく、またその中の2名は他大学、他学部からの進学者で聴覚言語障害の研究に触れる機会が少なかったため、いきなり論文を読んで発表させるのには、確かに無理があったように思う。また、今年度のように受講生が少ない場合、発表形式の授業は学生の負担が大きくなる。講義部分と演習部分の量や内容についての再吟味が必要であると思われた。